となん歴民（れきみん）だより

vol.78

令和６年９月 30 日発行

盛岡市都南歴史民俗資料館

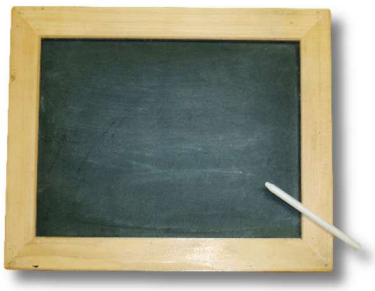
■展示替えのお知らせ　特別展示 ～昔の学び・昔の遊び～

展示室の一部にて開催中の特別展示「昔の学び・昔の遊び」から、資料の一部をご紹介します。

◆昔の学び　～筆記具～

藩政期、寺子屋での筆記用具はおもに墨と筆、紙でした。紙はまだ安価ではなかったため何度も重ね書きをしたり、砂に書いて消したりと工夫を凝らして筆記練習をしました。

明治期になると石板（石盤）が導入されました。石筆で書いた文字を布で消すことでくり返し筆記できるため、おもに低学年児童が使用しました。しかし、いくつかの問題点がありました。重く割れやすいこと、次第に字が消えにくくなるため子どもたちが唾を付けて拭くようになり不衛生であることなどです。また、高価であるため、代用品としてボール紙に砂などを塗布した紙石板も用いられました。



石板（せきばん）（復刻）

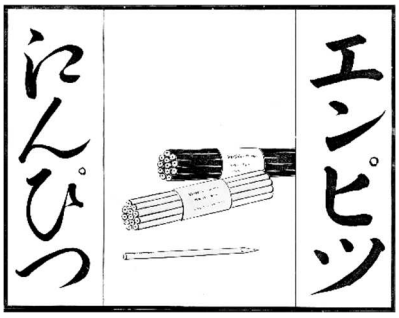
堆積岩の薄い板に、石筆（せきひつ）（蝋石を切った棒）や白墨を用いて字を書く。

ノート　寄贈

明治30年代に使用されたもの。

明治 20 年（1887）になると鉛筆の国内生産が本格的に始まり、また、機械による国産洋紙の大量生産が可能になったことから、明治 30 年代後半ころにはノートと鉛筆が使われました。とはいえ経済的理由から、石板も昭和初期まで引き続き使用されました。

石川啄木の小説『足跡』からは、明治 40 年（1907）当時、盛岡周辺地域で石板が使用されていたことがわかります※。自身が代用教員を務めた渋民尋常小学校をモデルに４月の入学準備の様子が描かれており、新入学児童の保護者が教員である主人公らに「石石板と紙石板どちらを持たせたら良いか」と相談しています。



← 新撰尋常日本読本掛図

（国立教育政策研究所 教育図書館貴重資料デジタルコレクションより）

明治 25 年（1892）出版。初学者が字を学ぶ教材に取り上げられており、鉛筆が一般に使用されていたことがうかがえる。

『尋常小学修身書 巻一』

（当館蔵）より →

明治 43 年（1910）出版。「物を粗末に扱うな」の項目に、鞄を投げ置いて遊びに行ったため石板が割れてしまった勇吉少年の寓話が掲載されている。昭和8年（1933）発行の同書ではクレヨンが折れた話に変更されており、筆記具の変遷をうかがわせる。

参考文献等：岩井宏實監修『絵引 民具の事典』2017 年、河出書房新社
添田晴雄「筆記具の変遷と学習」（石附実編著『近代日本の学校文化誌』1992 年、思文閣出版）
国立教育政策研究所 教育図書館貴重資料デジタルコレクション
※ 福岡市博物館ウェブサイト（アーカイブズ　企画展示 No. 264 身近な道具の近代史１）

となんの民話さんぽ ６　舟っこ流し

都南の民話と、
民話にまつわる史跡
などをご紹介します

毎年８月16日に行われる盛岡の夏の風物詩「舟っこ流し」（盛岡市指定無形民俗文化財）。その由来は津志田にあるといわれています。

文化年間（1804～1817）、津志田に遊郭があり繁昌していました。なかでも松前屋の遊女小時はたいへんな売れっ子でした。

ある年のお盆の15日、小時は馴染客に誘われ盛岡城下の見物にでかけました。翌朝舟橋を渡って帰るつもりでしたが、明方から降り出した大雨でまたたく間に北上川が増水したため、舟橋はとりはずされ、帰れなくなってしまいました。

大雨は５日間も降り続きました。ようやく止んだものの北上川は濁流のままで、舟橋はいつかけられるか分かりません。「早く帰らなければならない」と心を痛めた小時はとうとう耐えきれず、津志田に帰るため小舟を雇いました。しかし、渦まく激流には船頭もどうしようもなく、舟は川の中ほどで波にのまれてしまいました。

その後、舟橋や北上川辺や津志田街道に夜な夜な亡霊が出るとか、青白い鬼火が舟橋から津志田の方へ飛んでいったとか噂がたちました。小時の亡霊にちがいない、と哀れに思った人々は、霊を慰めるため、翌の盆の16日、読経の中美しく飾った舟を北上川に流し入れました。これが、今も明治橋で行われる「舟っこ流し」の由来です。

参考文献：都南村歴史民俗資料館『都南の民話』1985 年
盛岡市教育委員会事務局歴史文化課『もりおかの文化財』2008 年

民話ゆかりの史跡　舟橋跡

北上川舟運の起点に設けられた。当初は舟渡しだったが、延宝8年(1680)頃に舟橋が架設された。鉄鎖で 20艘ほどの小舟を係留し、敷板を並べて人馬が往来したもので、川の増水時には撤収し「川止め」にした。明治 7年(1874)に木製の明治橋ができるまで存続した。

舟橋跡　【盛岡市指定史跡】
盛岡市南大通三丁目
岩手県交通バス停「仙北町」「南大通二丁目」下車徒歩５分

＝＝　見て　さわって　動かして　深まる学習　＝＝

～昔のくらしを知る　盛岡市都南歴史民俗資料館の貴重な収蔵品～

★R6－第２回　寺子屋の机(文机)と教科書(往来物)

江戸時代後半から明治初期にかけて、町や村には多くの寺子屋が開かれ、「読み書き算」を学ぶ子どもたちが増えました。明治16年に岩手県が行った調査によると、盛岡城下には20校以上の寺子屋があったことが分かっています。

当館には、江戸後期から明治初期に寺子屋で使用された古い学習机と教科書があります。学習机は『文机(寺子屋机、天神机)』と呼ばれ、床に座って用いる机です。写真の文机は、幅88cm、奥行36cm、高さ26cm、墨のあとや多くの傷が残り、使い込まれた様子がうかがわれます。

教科書は『往来物』と呼ばれ、手紙の文例集から発達したものです。当館所蔵の往来物は「改算記」「庭訓往来」「百姓往来」「新童子手習鑑」などがありますが、中でも写真の「庭訓往来」が寺子屋で使われた往来物の中で最も普及したと言われています。

酷暑と呼ばれた今年の夏も過ぎ、季節は一気に秋となりました。何かを学ぶのにちょうど良い季節です。『往来物』には触れていただくことはできませんが、『文机』には触れていただき、どんな子どもたちがこの机で学んだのかを想像するのも楽しいかもしれません。

となん歴民だより　vol.78
令和６年９月 30 日
盛岡市都南歴史民俗資料館　発行

岩手県盛岡市湯沢１－１-38（**都南つどいの森**を目印にお越しください）
TEL/FAX 019-638-7228
時間 9：00～16：00　**休館日** 月曜日(祝休日の場合は翌平日)　**入館料** 無料